

後撰和歌集注釈 (一) — 卷一春上 (1-21) —

工 藤 重 矩

(一九八二年九月二日 受理)

凡例

一 本文は、高松宮家本の天福二年本を用いた。

一 異同は、小松茂美『後撰和歌集校本と研究』・大阪女子大学編『後撰和歌集総索引』・杉谷寿郎『天福本後撰和歌集』等に拠った。

一 注釈は、口語訳と注釈に分けた。訳は多くの場合、表面的な逐語的訳にとどめ、注釈において補足した。

一 注の参考として、『日本歌学大系』に収められる諸書に引用され注された各条を始め、『後撰集聞書註』(内閣文庫)『後撰集正義』(歌学大系別巻五)『後撰集抄』(季吟、山岸徳平編『八代集全註』)『後撰集増抄』(萩原宗固、『未刊国文学古註釈大系』)『後撰集標注』(岸本由豆流)『後撰集新抄』(中山美石)を主として参照した。現代の注としては『鑑賞日本古典文学7古今集、後撰集、拾遺集』などの選釈の他には、全釈に『後撰和歌集注解』(『愛知大学国文学』昭54・岸山武・河内章・黒柳孝夫)がある。『後撰和歌集研究史』(田島毓堂)にはさまざま便宜を得ることが

多い。各集総索引の恩恵も大きい。なお、引用の際には『後撰集』を省略して『新抄』『正義』の如くに言う。

正月一日、二條のきさいの宮にて、しろきおほうちきをたまはりて
藤原敏行朝臣

1 ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる

正月一日、二條の後の宮で、白い大褂をいただいて

降る雪のための蓑代衣を着る一方で、めぐみの春が来たのだなあ
と気づいたのでした。

二条の後は藤原長良娘高子。『尊卑分脈』に号二条后とある。承和九年(842)生、清和天皇の女御となり、陽成天皇・貞保親王等を生み、陽成天皇の即位(876)に従って皇太夫人、次いで皇太后となったが、寛平八年(896)宇多天皇の代、東光寺の僧善祐と姦通ありとして廃后となり、延喜十年(910)三月歿した。六九歳。天慶六年(943)本位(従三位)に復された。『古今集』に一首(4)。『古今集』には、東宮御息所時代

に、文屋康秀・素性・業平に詠ませた歌がある。

藤原敏行は、貞観八年(866)少内記、以後は大内記、六位藏人、中務少輔、右兵衛佐、右少将、藏人、中将を経て、寛平七年藏人頭となったが、八年四月病に依り頭を辞し、九年九月右兵衛督に任ぜられ、延喜七年(907)歿す。従四位下。家伝では昌泰四年(901)という(以上古今集目録)。村瀬敏夫「藤原敏行伝の考察」(『岡一男博士頌寿記念論集平安朝文学研究』有精堂昭46)が備わる。

この歌が何年に作られたかは不明。村瀬氏は「降る雪を実景とするならば、陽成朝の元慶二、六、八年には正月一日に雪が降っているから(三代実録)そのいづれかに詠まれたか」とされる。あるいはそうであるかもしれないが、「降る雪」を必ず実景としなければならないことでもないで、なお限定できない。正月一日に敏行が後の宮にいたとなれば、それはおそらく公的な役目(中使など)によってであろう。賜わった白き大樹は祿である。『大和物語』一三二段、『宇津保物語』祭の使などに白き大樹の祿のことがみえ、「桐壺」には、光源氏加冠の後に帝より左大臣に祿として「白き大樹に御衣一くだり、例のことなり」とある。樹は「桂、釈名云桂音圭漢語抄作樹云宇知岐婦人上衣也」(倭名抄)「桂樹ウチキ」(名義抄)で、ウチキと清音に訓んでいる。第三句「うちきつゝ」には樹を物名に詠み込んでいること、『新抄』に指摘がある。

「みのしろ衣」は蓑代衣に白衣を掛けている。『新抄』は「石原正明云、蓑代衣は雨衣といふ、今、合羽カッパと云物なり」と。しかし、『後撰集』(一三五五)の「中原宗興がみのの国へまかりくだり侍りけるに、道に女の家にやどりて、言ひつきて去りがたくおぼえければ、二三日侍りてやむごとなき事によりてまかりたちければ、衣を包みてそれが上に書き

て送り侍りける 中原宗興 山里の草葉の露もしげからむみのしろ衣ぬはずともきよ」や、「初音」の「かはぎぬはいとよし、山伏のみのしろ衣にゆづり給ひてあへなん」などをも併せ見るに、蓑代衣という定った衣があるのではなく、何にても蓑の代りに用いる衣を蓑代衣と言うごとくである。その「みのしろ」に、時に応じて「白」「身代」などを掛ける。平安後期には身代に用いることが多く、『狭衣物語』には「紫のみのしろ衣」という例もある。定家の『僻案抄』には「古歌とて せながためみの白衣うつときぞ空ゆくかりのねもまがひける (中略) 遠人のため、みの白衣とよめるか。蘇武、耿莽などを思よそへてよめる歌なれば、上古の歌とはみえず」といい、『後撰集』が初出であるという。この古歌、『俊頼髓脳』にも見えているが、出典は不明である。この歌の「みのしろ」も、遠き人の身代というのであろう。ともあれ、敏行の歌には「身代」の意味はない。

「ふる雪の」は『新抄』に「蓑代といはん料ながら、其時のさまにてもあるべし」と言うごとくで、実際に雪が降っていれば、効果は鮮やかであるが、白き樹を肩にかけたさまが既に降る雪の見立であって、実際に雪はなくともよい。『大和物語』一三二段では白雲に、「祭の使」では白波に白き大樹を見立てるのにも、そこに雲・浪が実際には無いのと同じである。しかも、「春来にけり」は後の恩をも含意しており、むしろそのことを言うのが一首の主旨であって、正月一日「春との対比として、白衣―蓑代―降る雪と、あやを織った歌であらう。

「春」の訪来を君恩にたとえるのは、『古今集』雑下(九六七)「時なりける人のはかに時なくなりて嘆くを見て、みづからの嘆きもなく喜びもなきことを思ひてよめる 清原深養父 光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思ひもなし」や、春上(八)「春の日の光にあたる我

なれど頭の雪となるぞわびしき」(康秀)など、定まった表現である。源は、中国に「礼記曰、天子者与天地参、德配天地、兼利万物、与日月並明、明照四海、而不遺微小」(『芸文類聚』帝王)などに発し、春正月に任官昇叙のことがあるので、とりわけ春光が君恩と結びつく。(↓19・136)

「ふる雪のみのしろ衣」は、「古る(雪の)身」をも掛けるであろう。降る雪のみのしろ衣の「の」の用法は少し落ち着きが悪い感じがありが、堀河本は「に」としてむしろ合理的であるが、それでは「古る身」とならない。老いた、冬の雪に降られるとき我身に賜わった白衣を蓑代に着て、後の恩の春が来たと気づいた、というのが、謝辞としてのこの歌の言わんとするところである。「降」に「古」をかけること、「古今集」(三三九)「あらたまの年の終りになるごとに雪も我身もふりまさりつつ」(元万)など、多い。

同じ敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」は類似の言いまわし。『続千載集』冬(六六四)「消ぬがうへにつもらばつもれふる雪のみのしろ衣うちもはらはじ」(雪満衣といへる心を 法皇御製)は、敏行の歌に拠るか。

はる立日よめる

凡河内躬恒

2 春立ときつるからにかすが山消あへぬ雪の花と見ゆらん

立春の日に詠んだ歌

春が立ったときいたので、それで春日山に消えきれずに残っている雪が、花と見えるのであろう。

『躬恒集』では勅撰集による増補部分(『私家集大成』I・232)にあ

り、歌詞は同じ。春が来て雪が花に見えるという表現は、『万葉集』(一六四〇・一六四五など)以来の見立であり、漢詩のそれでもある(小島憲之『古今以前』二六一頁)。『古今集』で例を挙げれば「春立てば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞ鳴く」(春上素性)「心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらん」(春上よみ人しらず)などがあり、類似の表現の枠組の歌には『拾遺集』巻頭の「春立つといふばかりにやみ吉野の山もかすみてけさは見ゆらん」(忠岑)がある。発想・表現ともにごく類型的で難解なところはなないが、一体この歌の「はな」は梅だろうか、桜だろうか。雪との見立の関係、立春の日という季節からは、梅の花がよいようではあるが、『拾遺集』春(四)「吉野山消えせぬ雪と見えつるは峰つづき咲くさくらなりけり」(不知)の、雪と桜の見立があり、春日山との関連でも、延喜二十一年京極御息所歌合の、忠房が躬恒等に詠ませて奉った二十首のうちに、「散りまがふ春日の山の桜花光に消えぬ雪と見えつつ」「み雪ふる春日の山の桜花えこそ見分かぬこきまぜにして」ともあつて、この歌と詞書のみからは一方に決めることはできない。

第三句「かすか山」は、二荒山本・片仮名本では「よしのやま」である。「か」「よ」、「か」「の」は紛れやすいので、誤写とも考えうるが、雪・花との結びつきは、春日山よりは吉野山の方がずっと強いので、その慣れにひかれたものかもしれない。

『千載集』秋(二二五)「秋立つ日よみ侍りける 侍従乳母 秋立つとききつるからに我宿の荻の葉風の吹きかはるらん」は、この歌を本歌としている。『温故抄』(島原松平文庫本)は、『後撰集』『拾遺集』の歌と、それを本歌にした歌とを組にして列挙したのだが、そこに侍従乳母の歌をあげている。

兼盛王

3 けふよりは萩のやけ原かきわけて若菜つみにと誰をさそはむ

今日からは、萩の焼け原をかき分けて、若菜を摘みに行きませんか
と、誰を誘おうか。(あなたの他にはいませんね)

『大和物語』八六段には兼盛が大納言(顯忠)に詠みかけた話とする。

む月ついたちころ、大納言殿に兼盛参りたりけるに、物などのたまはせて、すずろに、うたよめとのたまひければ、ふとよみたりける

今日よりは萩の焼原かきわけて若菜つみにと誰をさそはむ

とよみたりければ、になくめでたまひて御返し、

片岡にわらびもえずはたづねつつ心やりや若菜つままし

兼盛の歌の具体的な詠作事情は『大和物語』に伝えるごとくであったとして、『後撰集』の配列では、前歌の詞書「春立日」からして、これも立春の日のごとくに読め、「今日よりは」の「今日」が立春日ともとれる。『大和物語』では「正月ついたちころ」だから、立春よりは少し後である。ところが、『後撰集』の次の歌は「むつきついたちころ」の春雨降る日の歌で、兼盛の歌の配置は微妙である。2立春、3焼原の若菜摘み、4春雨、5若菜摘みという配列は、立春があつて野焼きがあり、その焼原に春雨が降って、若菜が芽ぶくということであろう。『後撰集』としては、3の兼盛の歌の時にはまだ若菜は芽ぶいておらず、だから、焼原をかき分けてでも若菜つみに行こうと、さて誰を誘おうかと、実際には野に出ぬままの期待の歌として配しているのであろう。実際の若菜摘みはもう一雨降ってからである。

また、前歌との関連では、春日野といえは若菜摘みであり(古今集18

・22)、「春日野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり」(古今集17)と野焼きの連想がある。『拾遺集』雑春(二〇二〇)「春日野の萩のやけ原あさるとも見えぬなきなをおほすなるかな」(中宮内侍)は、兼盛との前後ははっきりしないが、兼盛と類似の表現である。配列に、春日山―春日野―野焼―若菜の連想が働いていると考えてよいであろう。

作者兼盛王は系譜のはっきりしない人物であるが、父は兵部大輔篤行王であるらしく(歌仙伝)、天慶九年(946)王氏爵により従五位下に叙せられ、天曆年中に平氏を賜わって、越前権守、山城介、大監物、駿河守を歴任して、正暦元年(990)歿した。兼盛の出目については、拙稿「平兼盛の系譜」(語文研究四四・四五合併号)を参照されたい。さて、『後撰集』の「兼盛王」という表記が正しければ、撰集当時まだ平氏でなく王氏であったことになるのだが、『大和物語』では「王」を付していない段もあつて、断定できない。

二荒山本・片仮名本・堀河本などは作者を「かねみの王」「兼覧大君」としている。兼覧王は惟喬親王の男で、承平二年(932)歿。従四位下、宮内卿。(古今集目錄)『古今集』に四首採られている。『大和物語』は異本系の御巫本・鈴鹿本も八六段は「かねもり」としているのので、『後撰集』の方も一応「兼盛王」が正しいとしておいてよいであろう。「盛」「覧」の誤写ということになる。

『温故抄』は『続後撰集』春上(三三)「霞しく萩の焼原ふみわけてたがため春のわか菜摘むらむ」(入道前摂政左大臣)を本歌取とする。

ある人のもとに、にひまいり⁽²⁾の女の侍けるが、月日ひさしくへて、む月のついたちころにまへゆるされたりけるに、雨のふる

を見て よみ人しらず

4 白雲のうへしるけふぞ春雨のふるにかひある身とはしりぬる

ある人の許に、新しく出仕した女がいましたが、ずいぶん長く月日を過して、正月の上旬頃に、御前を許された時に、雨が降るのを見て

初めて御主人様の御前に仕えるすばらしさを知った今日こそは、老いの身で、長い月日を過したただのかいがあった我身だと分りました。

詞書、「にひまゐりの女」は、新参の女房である。「まへゆるす」は主人の御前に出ることを許されること。『枕草子』一七九段(宮に初めて参りたる頃)に「見苦し、さのみやはこもりたんとする、あへなきまで御前ゆるされたるは、さ思しめすやうこそあらめ」とも、『詞花集』雜下(四〇三)「にひまゐりして侍ける女の、前ゆるされてのち、ほどもなくみまかりにければ、よみ給ける 四条中宮」ともある、新参りしてある期間は、気心が知れるまで、御前に出ること許されないのである。「あくなきまで」許された清少納言は例外。

「白雲の上しる」は『抄』に「御前をゆるされたる事也」でよく、『新抄』に石原正明説として「うへとは上日の事、俗につとめ日といふ」云々とあるのは、疑問。「白雲の」は実景をかりて「うへ」と続ける枕詞的用法であるが、「くものうへ」という語に留意する解として、『後撰拾遺略注』(九大図書館音無文庫)は「或人云、歌にうへとのみあらば、常人の家の事ともいふべけれども、白雲のうへとあれば、禁中に限るべし、前書のおもむきかた／＼いぶかしき歌也」という。確かに、雲の上しるとは、禁中であると解すべき趣であるが、この女房の出仕先

が、女御后であるとすれば、矛盾はない。また禁中でなくても、御主人の前を「くもの上」ということはありうるであろう。但し、二荒山本・片仮名本・堀河本などは「白雲ののぼれる」とあって、雲上(禁中)は連想しにくく、枕詞的働きにとどまる。『後撰集』雜一(二〇八〇)に「外吏にしばしばまかりありきて殿上おりに侍りける時、兼輔朝臣のもとに送り侍りける 平中興 世とともに峰へふもとへおりのぼりゆく雲の身は我にぞありける」は、自分を雲にたとえ、雲が峰に昇るのを殿上することに喩えている。この用例からすれば、「白雲ののぼれる今日ぞ」(二荒山本など)も自分を雲にたとえているとみてよい。天福本系ではやはり、身の及ばない遙かに高い所(禁中であってもそうでなくても)を指す。

「春雨のふるにかひある」は、例の「降る」「経(古)る」の掛詞による。「経る」は詞書の「月日ひさしく経て」に対応している。だから、「ふる」は月日経るの意でよいごくであるが、恩に対する喜びの歌の発想は、我身の老いを言うことが多い(↓1)。類想の歌、『古今集』雜上(九〇三)「おなじ御時の上のさぶらひにて、をのこどもにおほみきたまひて、おほみあそびありけるついでにつかうまつれる 敏行朝臣 老いぬとてなか我身をせめぎけむおいずはけふにあはましものか」老いたことによつて幸にも今日の恩恵に浴したという発想は、「ふるにかひある身とは知りぬる」も同じである。雨降る—古る身の掛詞も、小町の「花の色は」(古今集一一三)「我身時雨にふりぬれば」(古今集七八二)をはじめ甚だ多い。時雨であれ春雨であれ、「古る」をかけることは同じだが、とりわけ春雨は、正月齢を一つ積んだばかりなので、その意識が強い。『後撰集』春上(二二)「春立ちて我身ふりぬるながめには人の心の花もちりけり」(不知)もその顕著な例である。この

四番の詞書に「む月ついたちころ」とあるのは、齢も一つ老いたばかりのころということを読みとるべき文脈である。従って「ふる」には、降ると経る（新参りして月日経た）と古る（老いた）とが掛けられている。

『注解』（片山・河内・黒柳）に「『はるさめ』に『恵みの雨』の意を含む」とするのはその通りであろう。例を挙げる。『後撰集』春中（八

〇）「壬生忠岑が左近の番長にて、文をこせて侍りけるついでに、身を恨みて侍りける返事に 紀貫之 ふりぬとていたくなわびそ春雨のただにやむべきものならなくに」も、「降り」に「古」をかけ、年老いてもひどく嘆かぬよう、春雨が何ももたらさずに止むことがない（必ず春雨のあとには若草が出る）ように、ふれば必ずそれだけのかいはありますよの意。

かくて、一首の意は口語訳のごとくであるが、この作者である女房は格別に老女房だと考える必要はない。「春雨のふるにかひある」の部分の修辭がこの歌の眼目であって、そこを謝恩の類型に従ってあやを織っているのである。もとより、ある程度の年齢（二十代後半あたり）以上であれば、なおよいけれども、こういう歌を詠んでいるからこの作者は中年であるとか老年であるとかの証拠にはならない。

なお、この歌は『古今和歌六帖』（雨）に出る。『標注』には『詞花集』冬（一四七）「もろともに山めぐりする時雨かなふるにかひなきみとはしらずや」（道雅）を掲出。

朱雀院の、子日におはしましけるに、さはること侍てえつかう

まつらで、延光朝臣につかはしける

左大臣

5 松もひきわかなもつます成ぬるをいつしか桜はやもさかなむ

朱雀院が、子の日（野に）おでかけなされたときに、さしさわりがありましてお仕えることができなくて、延光朝臣に遣わした歌

子の日の小松も引かず、若菜も摘まないままになってしまったので、はやく桜が咲いてほしいものです。（今日はお供できませんが、桜狩には必ず院のお供を致したく存じますので）

『朱雀院御集（代々御集）』に「御子日にいでさせ給けるに、おほんともにつかうまつらで奏し侍りける 左大臣（まつもひき） 御返し（まつにくる）」

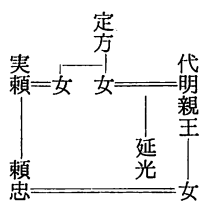
朱雀院は朱雀天皇の退位後の居所であるが、ここは帝をさす。朱雀院は醍醐天皇の皇子、母は穩子。延長元年（923）生、同三年立太子、八年九月二十二日受禪八歳、天慶九年（946）四月十三日退位、天曆六年（952）三月十四日出家、八年十月五日崩、三十歳。この子の日の野遊は退位後のことであろう。江戸時代の注は、朱雀院を宇多法皇のこととするが、延光の年齢と合わなくなるので、誤である。

源延光は、代明親王の男、母は定方女。延長五年（927）生、天慶五年（942）四月昇殿、九年正月殿上の勞により従四位下に敘せられ、同年十一月源姓を賜り、侍従、春宮権亮、内蔵頭、藏人頭、右中將を経て、康保三年（966）九月参議、安和三年権中納言、天禄三年中納言、天延三年（975）権大納言、四年六月十四日病に依り入道、十七日薨す。正三位。

枇杷大納言と称された。延光卿記という日記があったらしく、諸書に逸文が見える。延光と朱雀院の關係は叔父・甥の仲であり、院の在位中は、延光十六歳の時から殿上し、二十歳で殿上勞として従四位下に敘せられている（公卿補任）から、院に親しく仕えたと思われ、春中（六一）に「朱雀院のさくらのおもしろきこと、延光朝臣のかたりければ」云々

の詞書があるので、この歌の詞書と併せて、延光は朱雀院の院司だったかと思う。そうでなければ、左大臣実頼が延光にかかる内容の歌を送る意味がない。

作者左大臣は藤原実頼。延光は実頼の家司か殿人かであろう。実頼の大内大臣の請客使となっている(天曆三年、七年「九曆」)。請客使は身内の者が勤めるのが例である。また、実頼の男頼忠は代明親王の娘殿子女王を妻としている。更に、実頼は定方の娘である三条御息所能子に、醍醐天皇の崩後、通っている(大和物語一二〇段、後撰集雜一)。



右のことを図にすれば、上図の如くである。

この関係の中で、実頼は延光に、朱雀院に供奉できない旨のことわりを依頼したのである。

歌の意は明白で、補足すべきことはない。一首の主旨は、早く桜がさいてほしいということではなく、今日の子日の遊に供奉できないということである。不参のおわびをそのような言い方で行っているのである。

院、御返し

6 松にくる人しなければ春の野のわかなも何もかひなかりけり

院の御返歌

待っているのに来る人がいないので、春の野の若菜も何もかも、出かけてきたかいのないことでした。

子の日の野遊は、小松を引き若菜を摘む。『菅家文章』巻六(41)「扈從雲林院、不勝感歎、聊敘所觀并序」の序に「予もまた嘗て故老に聞けり、曰はく、上陽の子の日、野遊し老を厭ふと、其の事如何、其の儀如何

何といふに、松樹に寄りて以て腰を摩するは風霜の犯し難きを習ふなり、菜羹を和して口に啜るは気味の克く調らんことを期するなり」(原漢文)とその意義を述べている。『本朝文集』所収の和歌序(菅原在良)にも、「摘菜、偏祈七曜之精靈、攀松、遙期千年遐算」とある(二三〇頁)。

「まつにくる」は「待」に子の日の小松の「松」を掛けた。歌意は、『新抄』に「小松引若菜摘など、すべて今日の御幸の何事もはえなくして興ありとおぼさぬとなり」とある説明でよく分るのだが、「待つに」の主体を下句の「若菜も何も」とは解しえないだろうか。せっかく今日の子の日のために、小松は緑をまし若菜は青々と芽をだして待っていたが、左大臣が引きにこないというので、その甲斐がなかったことだ、の意で、院が小松・若菜の立場になっての詠であり、もとよりそれは院自身が甲斐なしと感じているのだが、表現として、松や若菜が甲斐なしと嘆いている態に詠じた歌ではあるまいか。

『標注』などに指摘がある『貫之集』(I・523)「家にて子のひしたるところ わがゆかでただにしあれば春の野の若菜もなにもかへりきにけり」(天慶八年の内の屏風歌)は朱雀院の歌よりは早いであろう。内裏の屏風だから朱雀院も属目の機はあったかと思う。影響が濃い。

子日におとこのもとより、けふはこ松ひきになんまかりいづるといへりければ よみ人しらず

7 君のみや野辺に小松を引にゆく我もかたみにつまむわかなをす、といってきたので

あなただけが小松を引きに野辺に行くのではありません、私も、筐に形見として、若菜を摘もうと思います。

「や」は反語。「君」「我」の対比。男が「小松」と言ったので、「若菜」と応じた。「かたみ」は、「箬箒、四声字苑云箬箒、漢語抄云賀太美、小籠也」(倭名抄)「筐アジカ、カタミ、ハコ」(名義抄)とある。

竹籠の小さいもの。「かたみに」の掛詞は「記念」とするもの(聞書註)と、「互に」とする注(正義・抄・新抄)とがある。『新抄』は「君ばかりに小松を引きに行給ふにや、我をもさそひ給はば、我もともどもにゆきて、たがひにつまん物をといふを、若菜を摘入る器の籠にいひかけたるなり」と、野遊に誘われることを期待したもののごとくに解している。「互に」とれば、『新抄』の解釈、成り立ちうるであろう。

「記念」「形見」と解した場合は、どうなるであろうか。『聞書註』は何の記念とまでは注していないが、参考になるのは、『古今和歌六帖』(第一、若葉)の「行きてみぬ人もしのべと春の野のかたみにつめる若菜なりけり」(貫之である(新古今、春上、「延喜御時屏風」とあり、「貫之集」では、延喜六年の屏風とする)。貫之の歌と七番との前後関係が不明なので、貫之の「春の野のかたみ」をそのまま適用してよいかは疑問であるが、「かたみにつむ」と続く言い方の時に、「互に」よりは「形見に」の方が、和歌としては連想しやすいのではなからうか。『万葉集』には「かたみ」が二五例あるが、全て「形見」であって、「互に」の例はない(掛詞にあらず)。三代集においても「互に」を掛けたと断定できる例はない。掛詞としては「形見」か「難み」かである。従って、この七番においても「形見」を掛けていると解するのがよいと思う。そもそも「互に」とは、相互に何かをしあうことの意であるから、草を摘むのに、かたみに(互)とは不自然な言い方である。「互に抓む」を掛けて

いるとも思えない。

詞書の「男」と作者の関係はどのようなものであろうか。「を」というからは「女」に対するもの、二者の間には男女関係を想定すべきであろうが、男が小松引きに行きますと言った真意も今一つはつきりしない。女を野遊に誘ったのではあるまい。ちょっとした挨拶であろうか。女の歌、私も若菜を摘みますとは何を言いたいのだろうか。小松を引くとは延寿(第二句「のべ」は野辺に「延べ」をかけるか)をいのること、若菜を食するの無病息災のため。おそらく、この歌、あなただけが小松を引いて長生きするというのでしょうか、私だって若菜を食べて若返りますわ、という冗談であろう。だから、女は、野遊びに誘われることを具体的行為として期待しているということでもないのである。基本的にはそのような軽い戯れの返事なのであろう。しかし、同時に、「かたみ」という語がおのづからもう恋愛の雰囲気をも併せ備えている。『古今集』では恋四の巻末四首(七四三―七四六)が「形見」の歌である。「かたみこそ今はあたなれこれなくば忘るる時もあらましものを」(七四六)などに顕著であるが、「形見」の恋歌は逢えない嘆きである(従って哀傷(挽歌)の形見の歌とも共通する)。形見に若菜を摘むとは、男に逢えない恨みを含めた表現である。男が野遊に出るといって、せめてその男の踏み歩いた野の若草を、男の形見に摘もうというのである。「真草茹る荒野にはあれど葉のすぎにし君が形見とぞ来し」(万葉集四七)「高円の野辺の秋萩な散りそね君が形見に見つしぬはむ」(同二三三)などは、いづれも挽歌だが、発想は同じである。『後撰集』時代の歌の常として、冗談が本心なのか、恨みが本心なのか、容易には見定め難いけれど、冗談と怨嗟とがないまぜにされた歌である。

題しらず

8 霞立たすがのゝべのわかなにもなりみてし哉人もつむやと

春になって霞が立ちこめている、その春日野の野辺の若菜にでもな
つてみたいものです、若菜を摘むように、人(あなた)が私を摘んで
くれるだろうかと思うので。

「霞立つ」は「春日」の枕詞とする(新抄)には及ばない。霞立つが
春日すがに続く例は『万葉集』に二例(一四三七・一四三八)のみであり、春
日野に霞が立つと詠む例は多いので、枕詞というよりは実景(但し観念
としての)として理解するのがよい。春日野の若菜摘みも、『古今集』の
一八・二二・三五七などに例があつて、特に三五七は屏風歌であつて、春
日野と若菜の連想は強い(参考、家永三郎『上代倭絵全史』第四章二「名所絵
の画題と其構図」)。

若菜を女性に喩えること、『古今集』恋一(四七八)「春日野の雪まを
分けて生ひいでくる草のはつかに見えし君はも」(忠岑)や『後撰集』春
上(一三三)などに見え、同類の発想としては、『古今六帖』(第一、子日)
「ねたくわれ子の日の松にならましをあなうらやまし人に引かるる」
(躬恒)や『古今集』雑下(九七二)「野とならばうづらとなきて年はへ
むかりにだにやは君がこざらむ」(不知)などがある。この歌の作者が
男か女かは不明だが、女の立場での詠作ではある。『抄』に「人にも愛
せられぬ人の述懐なるべし」とある。

『標注』に指摘する『古今集』俳諧歌(一〇三三)「春霞たちいづるたなびく野辺(新撰万葉)
の若菜にもなりみてしが人もつむやと」(興風)を、『新抄』は同じ
歌として扱っているが、前後は不明ながら、一方の歌に拠った別の歌と
すべきである。『古今集』のは、「つむ」を抓むとかけて俳諧とされて

いるが、八番のこの歌、『後撰集』の部立では「抓む」の掛詞は不要で
ある。

子日しにまかりける人(む)にをくれてつかはしける みつね

9 春のゝに心をだにもやらぬ身はわかなはつまで年をこそつめ

子の日の野遊しに参りました人にとりのこされて、遣した歌
春の野に我身の行かないのはもとより、心をさえ晴らすことのない
私は、若菜は摘まないで、(この正月にはまた)年を積んで老いてし
まうことです。

『古今六帖』(第四、祝、若菜)に出る。歌・作者同じ。『躬恒集』
(一・108)詞書なし。詞書、「おくる」はとり残されること。遅れて出か
けたのではなく、全く行かなかったのである。『抄』に「人は春遊に心
ゆく気色なれど、我は時にもあはで、野遊にも心ゆかどとしをつむとの
心也」と下句を解くごとく、老嘆とともに卑位を嘆く趣の歌である。

「心をだにもやらぬ」は、『新抄』に「春の野に我此身のゆかぬのみ
ならず、心をまでもやらぬ身は、若菜をばつまずして、ただ年を積のみ
ぞとなり。心をやるとは俗に気を晴らすといふに同じ」とあるごとく、
「身をやる」(出かける)と「心をやる」(気をはらす)とを兼ねた所が、
上句の技巧の眼目である。『兼盛集』(二)「道遠み行きては見ねど山
桜心をやりて今日は帰りぬ」(後拾遺集九七)や『後拾遺集』春上(二六)
「正月子日、庭において松など手さび引き侍りけるを見てよめる(よ
み人しらず) 春の野に出でぬ子の日は諸人の心ばかりをやるにぞあり
ける」など、同巧である(↓13)。

下句は、これも「若菜を摘む」と「年を積む」との、「つむ」のシャ

レである。『後撰集』賀（一三七二）「今年より若菜にそへて老のよにうれしきことをつまむとぞ思ふ」（太政大臣忠平）また『古今六帖』（第四、祝、若菜）「春の野の若菜ならねど君がため年の数をもつまむとぞ思ふ」（伊勢）「春立たんすなはちごと君がため千年つむべき若菜なりけり」（貫之）など、みな若菜―摘―積―年（事）の掛詞の歌。若菜摘む―年を積むの技巧は、四番に述べたごとく、正月に齢を重ねたばかりなので、実感の伴ったものであったであろう。なお『新抄』に「若菜はつまでといふを、若き意にいひかけたるならんかと、我友夏目麴磨いへり、げに然らんか、拾遺春上（二〇）円融院御製に、春日野に多くの年はつまつれど老せぬものは若菜なりけりとあるなどは、若き意にかけていへばなり」という。「若し」ということが、一首を訳すときに生かされるのではないが、「年を積む」の対比として響いている。

宇多院に子日せむとありければ、式部卿のみこをさそふとて

行明親王

10 ふるさとのへ見にゆくといふめるをいざもるともにわかなつみてん

宇多院で子の日の遊をしようということなので、式部卿の親王を誘おうとして、

古里の野辺を見に行くといっているようですので、さあ御一緒に若菜をつみましょう。

宇多院は、「土御門北、木辻東、法皇御所、刑部卿源湛宅云々、或抄云、西京宇多小路、但北小路当、町尻東行」（拾芥抄）とあり、宇多法皇の御所であった。作者行明親王は、宇多法皇出家後の皇子で、延長四年（926）生、五年八月親王宣下（醍醐天皇の皇子とさる）、承平七年（937）元

服、天慶九年（946）上野太守在任、天曆二年（948）五月二十七日歿す。二十三歳。母は京極御息所襲子。宇多院は実父法皇の院であるので「ふるさと」というのである。法皇は承平元年（931）に崩じているので、この歌が詠まれた時、既に故人である。近世の諸注が宇多法皇在世中の如くに言うのは、柿本獎氏の指摘するとおり（『平安文学研究』六六輯「後撰集解断章（二）」誤りである。

式部卿は、延長二年から八年二月（薨）までは宇多皇子敦実親王、その後任は弟宮敦実親王が襲い天曆四年（出家まで、次いで醍醐皇子重明親王となる。従って、行明親王が亡父の宇多院へ誘う相手としては、年齢からして敦実親王である。ただ、『後撰集』においては、親王をいう場合には、官名ではなくて、諱であるのが原則である。定家本（天福本）では、詞書一九例中官名はこの一例のみである。内親王は釣殿のみこ以外は女三のみこの如くである。作者名表記においても、三八番「朱雀院兵部卿のみこ」・一〇五五番「南院式部卿のみこの女」以外は諱である。伝本によってはゆれがあり、傍注が本文化しやすい部分でもあるのである。堀河本は「敦実親王」とする）、確言はしにくいだが、『後撰集』としては例外的表記であり、あるいは編者は、敦実親王とは確定できなかった（敦実親王の可能性もあった）ということであるのかもしれない。

天福本に従えば、宇多院で子の日の行事があり、行明親王が兄敦実親王を誘ったときの歌ということになるのだが、この詞書には甚しい異同がある。二荒山本は「宇多院かゝるに子日せんとありければ、ふんみつの朝臣をさそふとて」とあり、片仮名本は「白河イ実頼殿関白ニテ子日セムトアリケレバ、ノブミツノ朝臣サソフトテ」とし、作者についても堀河本は「行明親王母」と、桃園文庫本は「京極御息所」としミセケチにて「行明親王」とする。作者については、勘注の類が誤って本文化したと考え

られるが、「宇多院かゝるに」「関白にて」「ふんみつの朝臣」「ノ
ブミツノ朝臣」はいかに考えるべきか。

桃園文庫本は『校本と研究』によれば、「^{宇多院}かひて院に」という形にな
っている。これを参考にすると、二荒山本の元の形は「^{宇多院}かゝるてゐに」と
あったのではなからうか。「かゝるて」は、「宇」の草体「^ㇿ」を二字に
「かゝる」とよみ、「多」の草体「^ㇿ」を「帝」に、あるいは「^ㇿ」
を「て」に誤まったものかと思う。そうであれば、元来「宇多院」とあ
ったものが「かゝるてゐ(院)」となり、「かゝるて」が意不明となって、
「宇多院」と注もしくは異文が付加され、それが本文化して「宇多院か
ゝるてゐに」となったのであろう。桃園文庫本は「かゝるて院」の段階で
の、ゐ・ひの仮名違いである。

「関白」と「宇多院」とは誤写しそうにない。関白は、天慶四年(941)
に忠平が任ぜられ、天曆三年(949)歿するまで。康保四年(967)実頼が
任ぜられ、安和二年(989)六月摂政となるまで。従って、ここは忠平と
いうことになるが、忠平は太政大臣と呼ばれている。全く説明がつかな
い。

「ふんみつ」は、文光・文満等々適当な人物がいない。「ノフミツ」
だと、延光をあてうる。「ふんみつ」は「のふみつ」からの誤りであろ
う。延光は、五番に記したごとく、醍醐皇子代明親王の男、延長五年の
生。年齢的には行明親王より一歳若いだけである。代明親王の男だか
ら、行明親王が誘っておかしうはない。敦実親王は行明より三十四歳も
年上であるから、二十三歳で死んだ行明が誘うというのも、少しおかし
いのであって、法皇の崩後に、宇多院で子日をするとなれば、その主催
者は、敦実親王であるのが可能性として最も高いのである(延長八年敦慶
興、承平元年法皇崩、承平七年行明元服十二歳)。そうすると、天福本の詞書

にも疑いが出てくるが、もとより延光の方が正しいと決定できることでは
ない。

「ふるさとの野辺」は、『新抄』に「御父帝の大まします所なれば、
故郷とはのたまへるなるべし、子ノ日の御遊には小松引若菜摘ともに野
辺にてのわざなれば、今は御庭にて御遊はありとも、御歌にはかくのた
まはずべきなり」と述べるごとくである(帝の崩後だから、おはしまし、所
とすれば正確になる)。宇多院を「野」ということは、恋六(一〇三五)に
「宇多院に侍ける人に(下略)よみ人しらずうだの野は耳無山か」云々
という例がある。その歌に「耳無(成)山」を用いていることで知られ
るように、大和の宇陀(多)野を響かせている。宇多院⇌宇多野⇌大和
⇌ふるさと、という連想によって「ふるさとの野辺」は詠まれている。

「ふるさと」には故父帝の居所(自分も幼時から度々訪れた所でもある)の
意とともに、大和のイメージが重ねられている。表現の上では、「ふる
さと」は「ふるさととなりにし奈良の都にも」と詠まれたそれであり、
「駒なめていざ見にゆかんふるさとと雪とのみこそ花は散るらめ」(古
今集春下一二、不知)の上句は行明親王の歌に影響を与えているであろ
う。この「ふるさと」で若菜を摘むといえは、おのづから春日野のイメ
ージを持つ。『後拾遺集』春上(三四)「白雪のまだふるさとの春日野に
いざうちらはひ若菜つみてん」(能宣)は、一〇番の影響あるか。

「いふめるを」の「める」は、桃園文庫本・抄・新抄では「なる」と
する。意味上は「める」よりは「なる」の方がよい。「なる」は伝聞推
定だから、院に行くということを聞いて知ったことになる。「める」で
も具体的には同じことであろう。とすれば、式部卿(又は延光)は行明の
誘いがなくとも、宇多院には行く予定だったのである。従って、詞書に
「誘うとて」とあるのは、行くのなら一緒に行きましようといういみ

での誘いであろう。あるいは、「式部卿」が正しい本文とすれば、式部卿が行くということを聞いて、私も御一緒させて下さいといういみの誘いであるかもしれない。

はつ春の歌とて

紀友則

11 水のおもにあや吹みだる春風や池の水をけふはとく覧

春の初めのころの歌ということ

水の表面に波紋を吹き乱す、あの春風が、池の水を今日は解かしているだろうか。

『友則集』巻頭、詞書「立春日」で、歌は同じ。『古今六帖』（第一水）作者名不記。歌同じ。紀友則は『古今集』撰者ゆえ、伝は省略する。

春風が氷を解くというのは、『古今集』春上（二）「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風や解くらむ」（貫之）とあり、その典拠である『礼記』月令「孟春之月東風解氷」もよく知られるところで、友則の歌も間接的にはこれに拠るが、直接には『抄』が「白氏文集二池有波文氷尽開（春風春水一時来）」とある心なるべし、水の面にあや吹みだるは、すなはち波の文也」と指摘するとおり、『文集』巻二八「府西池」（倭漢朗詠集に採られている）に拠る。「水のおも」という語も、もとは『文集』巻二三「早春憶微之」に「沙頭雨染班々草、水面風驅瑟瑟波」や『菅家文章』巻一「臘月独興」に「氷封水面聞無浪」に見られる詩語である。和歌では小野篁が初めて用いた（古今集八四五）。

「水のあや」という場合は、多く織物に寄せてよむ。『拾遺集』雜秋（一〇九一）「水のあやを織りたちて着むぬぎちらしたなばたつめに衣か

す夜は」（平定文）、同秋（一九七）「水のあやに紅葉の錦かさねつつ河瀬に浪のたたぬ日ぞなき」（健守法師）など。『菅家文章』には「問著林前鶯語報、看過水上浪文書」と、文章に寄せている例もある。

第一、二句は第三句「春風」を修飾する句であって、春風の一般的性質を述べているのであり、実景ではない。『新抄』が「上二句は春風の常をいへり」というとおりである。下句も「やーらむ」と呼応して「時節に感じて思ひやりたる意」（新抄）である。一首全体想像の作である。『古今集』春上の「袖ひちて」や「鶯のこほれる涙今やとくらむ」と同巧である。

友則の歌とよく似た歌に『新撰万葉集』上の「水之上丹文織柔春之雨山之緑緒那倍手染濫」がある。『新古今集』春上（六五）『伊勢集』（大成・103）では「水の面に」とある。「春風」「春雨」「池の水」「山の緑」の違いはあるが、無関係ではあるまい。友則の歌が白詩に拠るとすれば、友則が伊勢に影響したとすべきであろう。

『温故抄』は『金葉集』（二六）の「風吹けば浪のあやをる池水にいとひきそふる岸の青柳」（源雅兼）をあげる。

12 寛平御時きさいの宮の哥合のうた よみ人しらず
吹風や春たちきぬとつげつらん枝にこもれる花さきにけり

吹いてくる風が、春がやってきたと告げたのだろうか、（春風が吹くと）枝の中にとじ籠っていた花が咲いてしまったよ。

『古今六帖』（第一、春風）歌同じ。『新撰万葉集』上に「吹風哉春立沼^{立来}砥告貫牟枝丹牢礼留花折丹藝里」とし、併載の詩は「寒灰驚節早春来、梅柳初萌自欲開、上苑百花今已富、風光處々是傷哉」である。『平安朝

歌合大成』によれば、「寛平御時后宮歌合」の本文にこの歌は見えない。

一首の意は『新抄』に「春が立たるぞと、花の木に、風が告しらせやしつらん、枝の中に隠て有し花が開出たるよとなり、春たちきぬは春立来ぬなり、さて花は広く春咲く花をさしていふなるべし、後世に花といへば桜ぞと心得るとはかはれり、古今集此集ともに桜の歌は大かた桜とよめり、又花とよみたるは詞書に桜とことわれり」とあるに尽くされる。

「花」を梅桜と限らないことは、『新撰万葉集』でも「梅柳初萌」「百花今已富」と漢詩に賦すところである。

「風が春を告ぐ」ということ、『抄』は「此歌童蒙抄云、先遣和風報消息と云る詩の心か」と注す。この詩は『白氏文集』卷十七「春生」と題するもの、「春生何處聞周遊、海角天涯遍始休、先遣和風報消息、統教啼鳥說由來、展張草色長河畔、点綴花房小樹頭、若到故園應見我、為伝淪落在江州」『倭漢朗詠集』早春に三四句が収められる。金子彦二郎『増補平安時代文学と白氏文集』は、此歌とともに『古今集』の「花のかを風のたよりにたぐへてぞ」（友則）をも、この詩に拠るとする。

風が季節の到来をつけること、源をたどれば、『礼記』の「東風解氷」「孟秋之月、涼風至」にあり、『古今集』の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」（敏行）も『礼記』による。しかし、この考えは平安朝の人々にはよく熟しており、『菅家文草』を見ても、「和風桃李質、暖氣綺羅粧」（巻一・6）「和風料理遍周遊、山樹紅開水緑流」（巻四・282）「和風先導薰煙出」（巻五・365）「応驚涼氣動」（巻四・297）など多く、敏行の「風の音にぞおどろかれぬる」は『礼記』というよりは、むしろ『菅家文草』の「応驚涼氣動」に近い表現である。漢詩の影響をいう場合、原詩からの直接のそれか、漢詩的教養によ

る間接的なものか、日本漢詩か、漢詩をふまえた先行和歌か、甚だ判別は難しい。この「吹風や」でも、直接に『白氏文集』からだと言いつてしまえないほどに、熟した発想なのである。

「枝にこもれる花」は未だ芽を出さない状態の花（花とはいえぬ枝であるが）。類似の発想としては、『万葉集』卷十九（四二八三）「梅花咲けるが中にふふめるは恋やこもれる雪を待つとか」が早い時期のもの。ふふむは蕾の状態。「冬木成」は、『万葉集』では春の枕詞に用いられるが、『古今集』冬（三三三）「雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲ける」（貫之）は木が冬ごもりしているとの用法。かく類似の発想はあるが、「枝にこもれる花」というのはこの歌が最も早い例で、中世に数例用いられる（玉葉集五八守覚法親王など）。

しはす許に、やまとへ事につきてまかりけるほどに、やどりて侍ける人の家のむすめを思かけて侍けれど、やむごとなきことによりてまかりのぼりにけり、あくるはる、おやのもとにつかはしける

みつね

13 かすが野におふるわかなを見てしより心をつねに思やる哉

師走の頃に、大和に用事に従って参りました時に、宿りました人の家の娘に懸想しましたが、どうにもならぬ大事なことで、

京にのぼってしまった。その翌春、娘の親に遣わした歌

春日野に生い育っている若菜（娘）を見て以来、心をいつも大和に馳せて、そのことはかり考えていることです。

『躬恒集』下（I・182）勅撰集による増補部分にある。

詞書、「ことにつきて」は、『正義』に「罪せられたるにはあらず、

公の御使に付て也」というごとくで、後文に「やむごとなきことによりて」とあるのも、公の用ということである。ただし、公といっても、朝廷の使とまで限定してよいかは疑問である。例えば、家司・殿人として勤仕している主家の用務であってもよい。ただ、どのようにも予定変更できる私事の旅ではないと理解すればよい。

歌は心明である。春日野と若菜は八番参照。『古今集』恋一(四七八)「春日の祭にまかれりける時に、物見に出たりける女のもとに、家をつねてつかはせりける 壬生忠岑 春日野の雪まを分けておひ出でくる草のはつかに見えし君はも」の傍がある。『続後拾遺集』恋一(六三九)「久方の雲井はるかに見てしより心は空になりしものを」(躬恒)は同巧の歌。

下句は、思ひやる(想像する)に心を「遣る」を掛けた。心を遣るというのも想像する(遠くの人のことを考える)というのの意味する内容は同じだが、「心」を遣るの場合は、常に一方に「身」を遣らず」ということが、言外に意識されている。『標注』等が参考としてあげる『貫之集』(四二五)「山里にすむをんな、子日する 足引の山辺の松をかつみれば心を野辺におもひやるかな」も、身は山里に居て、心を野辺に遣るのである。本集恋一(五一七)「思ひやる心は常にかよへども逢坂の関越えずもあるかな」(三統公忠)も同じ(↓9)。この二三番も、「我身は大和に行けないけれども」という気持(弁解)がこめられている。

この話は、旅先でたまたま娘に恋し、娘を残してやむをえず帰京するという恋愛譚の一つの型である。『大和物語』五八段、一六九段などはその変型であるし、『後撰集』(一二三五)「中原宗興がみのゝ国へまかり下り侍りけるに、道に女の家にとどいていひつきてさりがたくおぼえければ、二三日侍りて、やむごとなき事によりてまかりたちければ、き

ぬをつつみて、それがうへに書きつけてをくり侍りける」なども、同じパターンである。少し寛くすれば、例歌に引いた「春日野の雪間を分けて」の状況もこの型に入る。『伊勢物語』東の国での恋も加えてよい。そのような観点からみると、この躬恒の話はまことに物語的である。この話は史実として実際にあった話だとしても、躬恒としては、恋愛感情が昂じていうのではなくて、自分を前述のような恋物語の型の中に設定して、楽しんでいるのであろう。娘本人ではなくて、「親の許へつかはしける」というのも、その親もまた躬恒とともに、そのようなはなしとして楽しむのであろう。大人同志の文学的あそびなのである。この歌、そのような解釈をも許容するであらう。

14 もえいづるこのめを見てもねをぞなくかれにし枝の春をしらねば
かれにけるおとこのもとに、そのすみけるかたのにはの木のか
れたりけるえだをおりてつかはしける 兼覧王女

離れていつてしまった男のもとに、その男が通い住んでいた部屋に面した庭にある木の枯れてしまっている枝を折って、遣わした歌

春になって萌え出る木の芽を見るにつけても、声をあげて泣いてしまします、枯れてしまった枝は、春が来てもそれがわからないので。

兼覧王は、惟喬親王の男。仁和二年(886)従四位下、寛平二年(890)河内権守を始めとして、侍従、中務大輔、民部大輔、山城守、大舍人頭、神祇伯、彈正大弼、宮内卿を歴任、承平二年(932)歿す。正四位下。(古今集目録)六十五、六歳であらうか。その娘は知られていな

い。二荒山本は「一母」とする。母の名も不明。

『新抄』をひく。「かれにたる男とは、此作者と相馴て此作者の許に通ひすみたるが、今は絶たるなり。すべて男の女の許へ通ふをすむといふは常なり、(中略) 其すみける云々は、其男の通ひ来ていつも居たる所の庭の木の枯たる枝を折て、此歌をつけてやりたるなり」「今かく春になりて、木々の芽の出るを見ても、かくの如く一度枯れたる木は春といふ事も知らで、終に枯果るなり、我に離れたる人も此枯枝の如く、二度たち帰り給ふ事はあらじと思ひて、春をなき待るといふなり」

修辭は、「音をぞ泣く」に「根(「寝」もひびかせる)」「無し」をかけ、「かれにし枝」の「枯」に「離れ」をかけて、離れて行つた男を喩える。「枯」「離」を掛ける例は、『古今集』冬(三二五)「山里は冬ぞさびしまさりける人めも草もかれぬと思へば」(源宗子)など多く、枯枝・枯草に寄せて男の心変りを難する歌も多い。『古今集』冬(三三八)「わが待たぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず」(躬恒)、『後撰集』春下(八七)「よそにのみ花みるごとにねをぞなく我身にうとき春のつらさに」(不知)は類想の歌。

掛詞とすべきかどうか、詠歌時の事情によるが、「このめ」は「子(の目)」を掛けているのかもしれない。「すみける」とあるので、結婚状態にあった仲である。もし二人に子が生れていれば、「子」を掛けているとみてよいであろう。子がいなければ不用である。掛けていれば、子供のことをほめかせて、男の心の戻ることを訴えたのである。

女の宮づかへにまかりいでゝ侍けるに、めづらしきほどはこれかれ物いひなどし侍けるを、ほどもなくひとりにあひ侍にければ、む月のついたち許に、いひつかはしける よみ人しらず

15 いつのまに霞立覧かすがの、雪だにとけぬ冬と見しまに

女が宮仕へに出ましたところ、珍らしい間は、あれこれの男たちが女に言葉をかけたりなどしていましたが、間もなく一人の男と懇になりましたので、正月の初の頃に、女に言い遣つた歌一体いつのまに霞が立って春が来たのだろう。春日野さえもまだ雪の解けない冬と思つていた間に。(あなたはまだまだ男に心を許さない冬のような方と見ていたのに、いつのまに心を解かしたのでしょう、意外なことでした)

女の宮仕した場所は、男たちが何人も声を懸けたとあるので、宮中であらう。後宮女官か女房か、いづれとも決め難い。「これかれ物いひなど」の箇所、二荒山本・片仮名本・堀河本・雲州本など非定家本は「のたびけるに」(二荒山本)と尊敬語を用いている。殿上人を指しているのであらう。女が宮仕に出て、程なく正月になっているから、初出仕は前年冬である。紫式部の初出仕は十二月とされ、清少納言は春冬両説あるが、正月前というのは、初出仕の一つの機にあたるのであらうか。

歌、霞と春日野のこと八番参照。『古今集』春上(一九)「深山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜つみけり」(不知)春日野は若菜つむところ。春の兆は春日野に早い。その春日野の雪さえもまだ解けないといえ、春はなお遠い。まだ若菜つみの時ではない。新参りの女の固い応対ぶりから、まだまだ男に心を解くことはあるまいと安心していたら、いつのまにか雪はとけ霞は立って、若菜(女)は他人に摘まれていた。『古今六帖』(第一、若菜)「春立たば若菜つまんと占めし野に昨日も今日も雪は降りつつ」(赤人)の心で、男はいたのである。春日野といえは若菜摘み、若菜といえは若い女のとえ(↓813)、一五番のこの歌

の背後にはそのイメージがある。

春が来て雪がとけるように、女の心もとけるといふ発想は、『古今集』恋一(五四三)「春立てば消ゆる氷の残りなく君が心は我にとけなん」(不知)とあって、単に、雪がとけると心とけるのとの掛詞のみの歌と解してもよいのであるが、歌語の持つイメージを手繰ってゆくと、前記のような振りを持つ。現実の生活の中における伝達的手段から、かく歌集の中に一首の歌として立てられたときに持つふくらみ、いはば和歌における「あやの世界」(小島憲之)である。

題しらず

閑院左大臣

16 なを^(ほ)ざりに折つる物を梅花こきかに我や衣そめてん

軽い気持で折ったのだが、梅の花の濃い香を、私は衣にしみ込ませてしまおうか。

『古今六帖』(第六、梅)「なをざりに思ひつる物を梅の花こきかに我やことししみなん」(閑院太政大臣)

作者、閑院左大臣は藤原冬嗣。冬嗣は宝亀六年(775)生、天長三年(826)七月二四日薨。左大臣、正二位。太政大臣、正一位を追贈さる。

「閑院大臣」と号された(公卿補任)。承保三年奥書本、作者名「閑院太政大臣」とするのは追贈の官による。二荒山本、「閑院少将」とする。

閑院は「二条南、西洞院西、一町、冬嗣大臣家、金岡暈水石、公季公伝領云々」(拾芥抄)とされる。『尊卑分脈』では貞元親王・藤原朝光も閑院を号している。貞元親王は基経女と結婚しているので、その関係で閑院と呼ばれたのであろうか。朝光は兼通の男。閑院は冬嗣の後、北家摂関家に伝領されて来たものであろう。

歌の意、難解なところはない。「衣そめてん」について、『新抄』は「しめてんとよむべきを、染ノ字なるより、そめとは写誤れるなるべし」と、色にはそむ、香にはしむというのが定りであると言う。用例の数からすればそのごとくであるが、色を「しむ」の例(古今三八一・六六三)も、香を「そむ」の例(後撰三二)もあり、誤写とまでは言わないでよい。

『新抄』はまたこの歌を恋の歌かという。「又思ふに、恋の歌にて、初めはかりそめの戯に契つるを終にはまことに深き中ともなりゆくべきやうに思はるといふ意の如くにも聞ゆれども、いかがあらん」と。詠歌の場が不明である以上は、「いかがあらん」としか言えないが、恋の意を含ませれば、『新抄』の言うごとく、戯れに手折してみたら、意外にすばらかったので、いつそ溺れてしまおうか、と、これは女房相手の恋の歌のようである。なお、『新抄』は「てん」を推量にとっているが、「やーてん」で、ためらいの気持を表わす。染めてしまおうかな、どうしようかな、と相手をちよっとじらした物言いである。梅花を女性に喩えること、二七番になお述べた。

『重之の子の僧の集』(二四)に「なほざりにほり植ゑしものを我宿の萩の葉風に秋を知るかな」の上句、表現の型が似る。

前栽に紅梅をうへて、又の春をそくさきければ

藤原兼輔朝臣

17 やどちかくうつしてうへ^(あ)し^(あ)かひもなくま^(は)ちどを^(は)にのみにほふ花哉

前栽に紅梅を植えて、その翌年の春、花の咲くのが遅いので、家の近くに移植したききめもなく、咲くのが待ち遠しくばかり感

じさせる花だなあ。

『兼輔集』(1・4)「兵衛のつかさはなれてのちに、まへにこうばいをうへて、花のおそくさきければ、(歌同じ)」『大和物語』七四段「同じ中納言、かの殿の寝殿の前にすこし遠くたてりける桜をちかくほり植へたまひけるが、かれざまにみえければ、——みゆる花かなとよみたりける」

詞書、「花の遅く咲きければ」は、咲くのが遅いの意で(後撰二九五・四六二、拾遺九一二など参照)、まだ花は咲いていない。『大和物語』では「枯れ(離れ)ざまに見えければ」と、より具体的である。花が咲いていないとなると、歌の第五句「にはふ花かな」との対応が悪く、本文的に「見ゆる花かな」(大和物語)に劣るとする見方もある(柿本奨『大和物語の注釈と研究』)。「大和物語」の本文は確かに分りやすい。しかし、

「まちどほにのみにほふ」という言い方は、「おそくさく」というのと同じ語法であって、にはふのがまちどほであるの意と解してよい。『新抄』に引く『後撰集』夏(一四九)「郭公来るる垣ねは近ながらまち遠に

のみ声の聞えぬ」(不知)は、此歌と同じ技巧の歌だが、「待ち遠にのみ声の聞えぬ」と、打消の助動詞があつて、待ち遠しいばかりで声が聞えないと、素直な語法であるが、『貫之集』(1・299)「たちぬとは春はきけども山里はまちどほにこそ花は咲けれ」は、兼輔のと同じ語法である。「山里」は「春立てど花もにはほぬ山里」(古今集一五棟梁)である。花の咲くのも遅い。春は立ったときいても、山里は、花の咲くのはまだ待ち遠しい状態なのである。兼輔の「待ち遠にのみにほふ」という表現も同じである。詞書の「遅くさく」とは矛盾しない。(なお、貫之集歌仙家集本には、「むま車にのりて人おほく野にいでたり、さまぐの花さきまじりたり」の詞書があるが、この詞書、歌に適わず誤りであること『紀貫之全歌

集総索引」の頭注にいうごとくである。)

この歌、「やど近くと待遠とを対へてあやとせるのみ」(新抄)であつて、紅梅だから遅く咲くのだということまでは不用である。また、「まちどほ」に人事を含ませて、官職を期待する気持ちがこめられているとする解釈(柿本氏)は、家集の詞書に従えば肯定できる。

作者兼輔は元年慶元(877)生、承平三年(933)歿。権中納言、従三位、五十七歳。伝記、拙稿「藤原兼輔伝考」(二)(三)(語文研究三〇・三三・三六)がある。

18 延喜御時、哥めしけるにたてまつりける 紀貫之

春霞たなびきにけり久方の月の桂も花やさくらん

延喜の帝の御時に、歌をお召なされたときに奉った歌

春霞がたなびいてしまった。(かくて春になって、花が咲きはじめたが)月の中の桂の木も花が咲いているであろうか。

家集になし。『古今六帖』(第六、桂)五句「今やさくらむ」(作者不記)延喜の御時は醍醐天皇の御代。同じ詞書は『古今集』にも多く見える。「月の桂」は「兼名苑云、月中有河、河上有桂樹、高五百丈云々」(古今集余材抄)とあり、『初学記』(桂月)『白氏六帖事類集』(月)にも記事がある。『万葉集』は「楓」の字を用いている。

月の桂も文学的には地上の木と同じに扱い、春は花がさき、秋は紅葉する。『菅家文章』(巻五・385)「月夜翫桜花」に「莫言天上桂華開」とあるのは春のこと。『古今集』秋上(一九四)「久方の月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらん」(忠岑)は秋のこと。

『新抄』は「春は諸木の花咲く時なるゆゑに、月の中の桂樹も花さくやらん、其桂の花のほひにて、かく霞むと見ゆるとなり」とく。後半の、霞を桂の花のせいとするのは疑問。霞と花との取合せの場合は、霞は花を隠すものと詠むのが通例である（後撰六三は例外的に霞と花とが「色とよむ」）。更に、この歌の構文は「――けり。――や――らむ」という型による。「雪のうちに春は来にけり。鶯のこほれる涙今やとくらむ」（古今集四）「秋萩の花さきにけり。高砂のをへの鹿は今やなくらむ」（古今集二一八）と同じ梓組である。この詠法は、上句において、春が来た、萩が咲いた（即ち秋が来た）と、まず事実を指摘して、その事実に伴って継起するはずの現象を「今はもうそのことが起っているだろう」と下句において想像する。この一八番の歌においては、「春霞たなびきにけり」と事実を提示する。即ち、春が来たということである。春がき、霞たなびいて、地上では花も咲きはじめた。その事実に基づいて、月の世界でも花が咲いているだろうかと思像するのである。霞を花に見立てたのではない。

『温故抄』は『新勅撰集』冬（四一七）「雲井よりちりくる雪は久かたの月のかつらの花にやあるらん」（藤原清輔）を指摘する。

おなじ御時、みづし所にさぶらひけるころ、しづめるよしをなげきて、御覽せさせよとおぼしくて、ある蔵人（お）にくりて侍ける十二首がうち みつね

19 いづことも春のひかりはわかなくにまだみよしの山は雪ふる

おなじ御時に、御厨子所に仕えていたころ、我身の沈淪していることを嘆いて、帝に御覽にいらして下さいという気持で、ある

蔵人におくりました十二首のうちの歌、

どこには照らぬとも、春の光は分けへだてしないのに、まだみ吉野の山には春の光が到らず雪が降っている。

『躬恒集』（歌仙家集本、「大成」Ⅴ・1）「延喜の御時に、みづし所にさぶらひしにつかさめしの比、ともにをくれたりしかば、御らんぜさせよと思ひて、あるをんなくら人のもとにやりし」の詞書あって、「いづことも」の歌など五首の愁訴の歌が並ぶ。書陵部本（「大成」Ⅰ・4）は「またこれもうちにたてまつれる」（2の詞書）として十四首の愁訴の歌が並ぶが、秋の詠も混じっているので、一時に詠まれたものではない。西本願寺本（「大成」Ⅳ・427）は詞書『後撰集』に近いが「蔵人」ではなく「ある人」となっている。

御厨子所は「四位の殿上人、別当となり、民部大輔・五位を以て預りとなす。後凉殿の西庇に在り、内膳・内蔵・造酒・大膳及び諸御厨・衛府の御費を以て朝餉及び朝夕の御膳を供す」（拾芥抄）という部署である。躬恒がこの所にいたのは、「古今集目錄」に「寛平六年二月廿八日任甲斐権少目、延喜七年正月十三日任丹波権大目御厨子所」とあり、「古今集序」では「前甲斐少目」とあるので、延喜五年四月以降のある時から延喜九年正月十三日までである。従って、この歌は、延喜六、七年の正月ということになる。なお、躬恒の男忠見も「延喜御時、みつねがさぶらひける例にて、御づしどころにさぶらはせむと仰せられて、宣旨の三月まで下らねば」と詞書する歌があり、『三十六人歌仙伝』によれば、天曆八年五月に御厨子所定外膳部となっている。

「御覽せさせよとおぼしくて」とは、天皇のお目にかけていただいた意。蔵人は天皇に日常的に仕える職だから、天皇への愁訴のつて

としては最も適しているのである。同じ躬恒に「延喜御時、ときの蔵人のもとに、そうしもせよとおぼしくてつかはしける」の詞書をもつ歌がある(後撰集二一九四)『躬恒集』歌仙家集本は「をんな蔵人」としているが、女蔵人は女官としても下臈であつて、帝に愁えるつてとしては不足である。西本願寺本は「ある人」ともあるので、歌仙家集本に「女蔵人」とあることを以て、『後撰集』の「蔵人」を女蔵人と解するのはよくない。仮に史実が女蔵人であつたとしても、『後撰集』の編者は男の蔵人として記しているとは見るべきである。

春光遍く照つて区別しないこと、春光を君恩に喩えること、一番に略述した。その補足をする。『古今集』春下(九三)「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲ける咲かざる花のみゆらん」(不知)『古今集』雜上(八七〇)「石上の並松が宮仕もせて石上といふ所にこもり侍りけるを、にはかにかうぶりたまはりければ、よろこびいひつかはすとてよみてつかはしける 布留今道 日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里に花もさきけり」など。『白氏六帖事類集』(第一、目)には「無私照」とある。

「まだみ吉野の山は雪ふる」は我身に未だ春の恩恵の到らぬことをいうのは明白であるが、我身を吉野山に喩える必然性は何なのか、はつきりしない。吉野山は雪の深い春の遅い所であるから(『古今集』春上(三)「春霞たてるやいづこみよしの吉野の山に雪はふりつつ」、他所よりも春が遅いということ吉野山としただけなのだろうか。吉野を連想させる何かが躬恒にあったのだろうか。延喜十六年九月、石山御幸の宇多法皇に「いづみにてしづみはてぬとおもひしを今日ぞあふみにうかぶべらなる」と詠んで奉ったときは(躬恒集)、前和泉掾であり、「泉に沈む」と「和泉掾で終る」とを掛けている。この時は何によるのだろうか。

人のもとにつかはしける

伊勢

20 白玉をつゝむ袖のみながるゝは春は涙もさえぬなりけり

人のもとに遣した歌

白玉の涙を人に見えぬように包みためる袖が、ひたすら川のように流れるということは、春は涙も凍らないのですね。

『伊勢集』(『大成』I・114)詞書なし(113の詞書は「春のおもひけるころ」)。歌同じ。『古今六帖』(第五、玉)第五句「涙のたえぬなりけり」

「白玉をつゝむ袖」は諸抄指摘する『古今集』恋二(五五六)「つつめども袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり」(安倍清行)に拠る。他にも『古今集』別(四〇〇)「あかずして別るる袖の白玉を君がかたみとつつみてぞゆく」(不知)もあり、白玉と涙の比喩は『古今集』五九・九二二などにもある。「つつむ」は「包」と「慎」の掛詞。人を恋して涙を流しているとは知られぬように、袖で隠しているとの意である。

「袖のみ」の「のみ」は『新抄』にも言うごとく、強調の用法で、ひたすら流れるの意。『古今集』夏(一五〇)「誰かまさと音をのみぞなく」など。「なかる」は「流」と「泣」の掛詞。涙川のイメージ。

「さえぬなりけり」の「さゆ」は凍る。『名義抄』では「凍」を「コホル・サユ」などに訓んでいる。涙が凍るという表現は、「鶯のこほれる涙いまや解くらむ」(古今集)が著名だが、一度涙川という観念を介すると、『古今集』恋二(五七三)「よとともに流れてぞゆく涙川冬もこほらぬみなわなりけり」(貫之)のごとくになり、袖が凍るという例も少なくない(古今集五九六、後撰集五七五など)。しかし、白玉が凍るという言い方はない。

「かくて、一首の意は袖につつまんとする涙の、つつみあへずしてかくひたものに流るるは、春は氷も解けて流るる時なるゆゑに、我が涙も氷らずして流るるよな、といへり」（新抄）となる。やや補足すれば、結句の「なりけり」は、いわゆる気づきのケリである。今までは、涙とは白玉のこと、袖に包めば包むことができると思っていたのに——耐え忍べると思っていたのに——自分でも思いがけないほどに、人目はばからず涙を流していると、男に言い送ったのである。

『後撰集』恋一（五四六・七）の時平と伊勢の贈答も類似の発想である。

心ざし有ながらえ逢はず侍りける女のもとにつかはしける

贈太政大臣

ころをへてあひみぬときは白玉の涙も春は色まさりけり

返し

伊勢

人こふる涙は春ぞぬるみけるたえぬおもひのわかすなるべし

作者伊勢は藤原継蔭の女。七條后温子の女房。宇多天皇に召されて皇子を生んだ。のち、敦慶親王との間に中務を生んだ。『古今集』に二十二首を採歌され、当時の代表的歌人。伝記に、関根慶子「伊勢」（『中古の歌人』日本歌人講座2）などがある。

ひとにわすられて侍けるころ、雨のやまずふりければ

よみ人しらず

21 春立てわが身ふりぬるながめには人の心の花もちりけり

男に忘れられていましたころ、雨がやまずに降り続いたので、春が来て、我身は一つ年を重ねて老いてしまい、忘れられてしまった物思いに沈んでいます、この春の長雨にうたれて花が散るよう

に、あなたの心も老いてゆく私から離れてしまうんですね。

『古今六帖』（第一、雨）に作者伊勢としてある。『伊勢集』になし。

「春立ちて我身ふりぬる」は、新年に齡を一つ加えたことによる老いの意識（↓4）。『古今集』春上（二八）「百千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく」（不知）同冬（三三九）「あらたまの年の終りになるごとに雪も我身もふりまさりつつ」（元方）など、新年を老いととらえる。この作者も、男から忘れられて我身の老いを歎く。「ながめ」は「長雨」と「嘆」の掛詞。この掛詞も「ふる（降・古）」と同様に多用される言葉だが、著名な例としては小町の「花の色はうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに」（古今集春下一二三）がある。「ふりぬるながめ」は景としては「降りぬる長雨」を、情としては「年老いたということによる物思い」をいみするが、「ふる」にはさらに、男から捨てられたの意の「古す」を響かせている。「秋といへばよそにぞきしあだ人の我をふるせる名にこそ有りけれ」（古今集恋五）などの「古す」（古いもの、過去のものにする）である。

「心の花」は『古今集』恋五（七九七）の小町の歌「色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」や、同恋五（七九八）「我のみや世をうくひずと鳴きわびん人の心の花とちりなば」（不知）などに見える。心という花。心を花に喩えた。これは負の価値の比喩であって、移ろいやすい心という。『古今集』春下（八三三）「桜花とく散りぬともおほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ」（貫之）と、桜花よりもはやく、風も吹かぬのに散るのが「人の心の花」である。「古今集序」に「今の世の中、人の心花になりけるより」と評された、その「花」であって、「実」はない。

春の長雨に、花が散り、花である男の心もまたうつろってしまふ。人

の心の花は、庭の花と違って散らないものと思っていたのに、やはり散るものだった。今更にその事に気がついた、という気持が、「散りけり」の「けり」で表わされている。

この歌、上句、下句ともに小町の歌を用いて、小町風を意識しているようである。因みに、二一番及び右の諸例から推せば、小町の「花の色はうつりにけりな」の「花の色」も、小町自身の容色ではなく、男の心であろう。老いて男に去られる嘆きの歌である。

なお、歌の配列、「春雨」ということで此所に置いたのであるが、「花も散りけり」はやはり穏当な配列ではない。